



聖書のことば

平和を実現する人々は幸いである。
その人たちは神の子と呼ばれる。

マタイによる福音書 5章9節

2015年8月

野毛山キリストの教会

野毛山キリストの教会では、毎年8月第1主日の平和聖日に、「平和を語る会」を開催してまいりました。

語り継ごう！戦争の悲惨さ・恐ろしさ

受け継ごう！平和の大切さ

今年2015年、戦後70年にあたり、「あなたの考える『平和』とは…」 「戦争体験」 「みんなに伝えたいこと」 「1945年8月15日 あなたは何をしていましたか…」 …など、いろいろな角度から「平和」についての原稿・ひとことを書いていただきました。

原稿、ひとことをお寄せくださいました方々に感謝いたします。

原稿の長さなどにより、順不同に載せておりますのでご了承ください。

戦後70年。

日本は、現在、戦争を知っている70才以上は人口の約15%だそうです。

今回、冊子を作るのにまとめております時、2003年の資料を読み返しました。

野毛山キリストの教会でも、2003年の平和聖日アンケートを出していただいたときは戦争を体験された方は45%でしたが、今回は右のグラフにもありますように、約22%でした。

戦争の恐ろしさを知らない世代が増えています。

それはさまざまなことにも言えるのでしょう。

阪神大震災から20年、東日本大震災から4年半・・・
だんだん知らない世代が増え、いつしか忘れ去られていきます。

やはり忘れないこと。風化させないこと。それが大切だと思います。

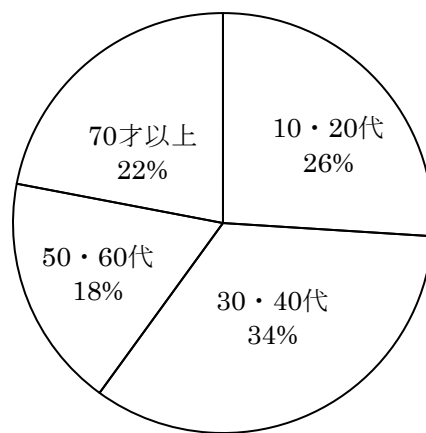
「平和」とは戦争がないという状態だけではなく、住む家があって、着るものがある、食べる物がある、家族がいて、好きなことができ…

世界中の人たちが「平和」を望んでいてもなかなか実現できないのが人間です。

キリストによる平和を祈り、喜ぶ人と共に喜び、悲しんでいる人と共に悲しんでくださるイエスさまに倣っていきたいと思います。

(奈良亜樹子)

原稿・ひとことを
お寄せくださった方々



「敵兵を撃てなかった哲学青年」

大谷 正義

それは彼Tが軍国日本の一兵士として、北支の最前線にあったときのこと。「撃て」の命令に反し、どうしても引き金を引けない。彼のヒューマニズムが天皇の権威に優越したが、代償は大きかった。重い懲罰から生体実験まで。しかし、奇跡が。Tを案じた姉からの手紙が、軍医を動かしてTは本国送還となった。何と姉の手紙が「君死に給うことなかれ」の与謝野晶子さながらに、奇跡を生み、弟を救った。戦後、この姉弟と交わり、この貴重なエピソードを聞く機会に恵まれたわたしは感動してやむことがなかった。戦争の不条理とそれをのりこえるもの。

「戦争中のこと」

仁田 秀子

日本が戦争をしていた頃から戦後数年まで昭和16年から昭和24年程の間、生活必需品の多くが不足して居ました。お米に始まる食料、衣類、燃料等自由に買うことが出来なかったのです。配給制度があって、人間一人が一日に食べる米の分量や価格まで国が決めました。育ち盛りの子供の居る家庭にとってそれはどんなに苦しいことだったでしょう。お米の代わりにじゃが芋、それも洪水の被害にあってひどく傷ついた物が入っていたりしたのです。すべての物が配給によってしか手に入らない時代だったのです。又、小学生が空襲の被害にあわないように学童疎開が行われました。子供達を夫々の家庭から離して集団で地方へ移したのです。受け入れる方も大変でした。空襲の恐れはなくとも、多勢の子供達に十分な食事を与える事はできません。疎開を経験された方達は飢えの苦しい思い出を持って居ます。戦争は人の心を蝕みます。今、沢山の食品が無駄に捨てられることが社会問題になっていますが、実際に戦中戦後を生きて来た私はすべての物を粗末に扱うことが出来ません。

坂本 正夫

1945年8月15日12時頃 父と私は、家から100メートルぐらい離れた所で防空壕を掘っていた時、近所の叔母さんから、戦争は負けたから防空壕は掘らなくてもよいそうだよという言葉を見ました。

人が平和を口に語る時、救い主イエス・キリストに聴くことが大切です。もし、人が平和の道を知っていたら、十字架の出来事はなかった筈です。よって、誰でも信仰により、イエス・キリストに聞く必要があります。
(2003年8月平和聖日のアンケートより)

「平和を考える」

金児 栄治

テーマにもありますように、戦後70年を迎え、これからの日本。すなわち日本の国と国民は将来どうあるべきか、どのように「平和」を守っていくべきか、世界各国の中で唯一、原子爆弾の被害を受け、真の平和を樹立することの大切さを知り、求めているのではないのでしょうか。数年前に読んだ五木寛之著の「下山の思想」が心にうかんで参りました。私たちは今日まで、物質的、精神的に、丁度登山するように上ばかりを見上げてきましたが、(すなわち獲得することを求めてきましたが、)私たちが今日あることに冷静に見つめることが大切ではないのでしょうか。すなわち「下山の思想」を見つめて生きることが求められているのではないのでしょうか。過日、信頼する友と1945年(昭和20年)5月29日の横浜大空襲で焼死された人びとの記念碑を見てまいりましたが、どの事柄も二度と起こしてはならないと思います。その意味において「安保問題」「憲法九条」をおかさねず、恒久の平和を樹立して参りたいと思います。

自分を生きる、神(キリスト)と共に生きる。

Doing 何かを行う Being 神と共に在る(インマヌエル)

「真の平和」

大瀧 慧

「真の平和とは、主イエス・キリストの中に、すでに完成して存在するものです。私達が主にあって切に祈るならば、主はその平和をお与えくださるのです。」と7月19日主日礼拝説教にて示されました。誠に感謝です。

牧野 邦子

私は小学校5年生の時に終戦を迎え、その年の夏休みに学校の先生から「宿題はやらなくていいから作文をひとつ提出しなさい」と言われ、この作文を提出しました。

「父さん、母さん泣かないで。
おばちゃんたち、先生、泣かないで。
みんなが泣くと私も悲しくなる。
私がいつまでも側にいてあげるから」



「戦争が終わった」

横溝 貢

戦争の禍は子供達を苦しめ、家庭をこわし、全ての人々を苦しめる他なにもありません。地球上の全ての人々が仲良くして平和な国を作らなければいけないと思います。

1945年8月15日正午、少しのごはんの上に煮たじゃがいもがたくさんのお昼ごはん(お米を節約するため)を食べていた時と思います。母が(父は戦地へ行っていました)戦争が終わったとラジオで放送されたことを言われました。(玉音放送と言って天皇陛下が日本は戦争に降伏したことのラジオを通しての放送)私達は外へ出て空の新しい空気を精いっぱい吸い込んだことが思い出されます。もうこれからはB29の爆撃が無くなり、ゆっくり夜休めるという気持ちです。それまで枕元には必ず、着るもの、くつ、防空ずきん(頭を保護するわたの入った布)などを置いて休んだのです。小学校(国民学校と言いました)4年生の時に、戦争は終わり、9月2学期が始まる時、学校からの連絡で教科書を全部と筆と墨、スズリを持参するよう言われ、教室に入りますと、先生は「ここからここまで筆で黒く塗りつぶしなさい」と言われ、「修身」と言う教科書はほとんど黒く塗りつぶしました。国の指導方針が民主主義国家になったのだと言われました。なにやらさっぱり理解できなかったのが事実でした。神奈川県で生まれた時から住んでいた家は爆撃で焼失しました。学校も焼失してしまいました。小学校3年生まではほとんど勉強はしていなかったと記憶しています。

戦争が終わって4年生から学校で安心して勉強、そして運動が出来るようになったのです。以上、その時の思い出の一端を記させていただきました。

「歴史は繰り返す」と古代ローマの歴史家クルティウス・ルフスの言葉だそうですが、そうならないことを切に望みます。

松山 令子

毎年8月になると戦争の傷跡が深く悲しみとなる人々、戦没者20万人の沖縄戦争を体験して70年、教会では子供達と戦争と平和について学び、讚美し、語り合い、子供達の未来の幸せを神さまに共にお祈りできますこと、平和聖日に感謝です。

「平和への願い」

坂本なつよ

1945年8月15日、小学生だった私は、茨城県の霞ヶ浦の近くに住んで居りました。家から15km位の所に日本でも有名な霞ヶ浦航空隊があり、今は自衛隊の基地となって居ります。近くの田圃には最近まで爆弾の落ちた穴がいくつも残っていました。

1945年8月10日～15日の間頃には、上空をB29が数えきれないほど飛んだのを思い出します。又、家から3kmくらいの所にも、小さな航空隊があり、兵隊さん達が近くの道を行き来していました。子供達は危ないから外で遊ばないように言われていたことを、毎年この時期に思い出します。戦争が終わってすぐ平和でしょうか。そんな事はありません。戦争が終って戦争のために外国に行って戦っていた人々が多勢帰国してきました。しかし、住む場所もない、働く仕事もない状態でした。近くの神社などに住み、近くの農家に米を貰いに来ました。はじめは湯のみに一杯位あげておりましたが、1日に何十人と来るようになり、農家も困り果てひと握りと減っていきました。先の一人が家から見えなくなると次から次へと続いて来るのです。戦争が終わってもこれで平和と言えるでしょうか。

今、世界中、いろいろな問題が起っています。戦後70年の今も完全復帰していない沖縄の事も心にとめていきたいと思います。誰が見ても、平和と感じられる時代が来ることを祈ります。

「平和」

伊藤 直美

戦後70年。私は終戦の時1才でした。
だから戦中生れです。昭和31年野毛山に引っ越してきて数ヶ月で中学生になりました。
その時友だちになった女の子のことを書きたいと思います。Jちゃんは私の友だちとしては新しいタイプの子です。ひとことで言うと明るくない。いつも何か考え事をしているような、していないような、はっきりしない。遊ぶのか遊ばないのか時間がかかる。楽しいのかそうでないのか。私はこのタイプに出会ったことがなかったのでとてもびっくりしました。ある日曜日、私を訪ねて教会学校に来たのです。午後は長者町のJちゃんの家に行くことになりました。そこには生まれたばかりの赤ちゃん、4才、7才の妹がいて、お母さんは内職をしていました。その後Jちゃんとは二人友だちになっていきました。Jちゃんのことを少しずつわかってきました。Jちゃんの生まれる前にお父さんに召集令状が来て南方で戦い、終戦になっても帰ってきません。母と子は、父の実家で何年も待つ生活をしていました。お骨は帰りませんでした。「戦死」の知らせが届きました。そうしてすぐにお母さんはお父さんの弟と夫婦になったのです。戦後よくある話かもしれませんが、Jちゃんにとってはやるせないことでした。中3の夏に進路の面談があり、“父”は平沼高校でなければ就職と先生に言っています。相談などなかったそうです。Jちゃんの子守りと勉強の秋が始まりました。高校を出ると父母とのつながりはほとんどなくなり、大人になると人との付き合い方がとても難しくなってしまう、戦争とは？の運動にだけ自分の場を見つけるようになりました。
今も苦しそうなJちゃん、戦後はまだ終わっていないと思う私です。

「戦争に思う事」

中村 素子

戦後70年、この間曲がりなりにも、一度も他国を攻める事無く、又、攻められる事も無く過ごして来ました。これも平和憲法が有り、先の戦争を経験された方々が語り伝えて来て下さったからだと思います。戦争を起こすのは人間、それも大人です。ひとたび戦争になれば、大切な自然、世界遺産、そして、人の肉体、心を破壊してしまうのです。戦争を体験された皆様には、辛く、人に語りたくない出来事とお察し致しますが、「戦争を知らない子供達」も70才を越えています。どうか、私達に語って頂き、又、私達も子供、孫と若い人たちに戦争の悲惨さ(日本の犯した罪をも)を伝えていきたいと思います。
そして、平和を作り出す人でありたいと。

「平和を願って」

佐藤けい子

私達の教会の「平和聖日」には、たくさんの平和について聞き、考える、学びの一時を過ごします。
そしてそこに集った人々と共に
♪キリストの平和が わたしたちの心の すみずみにまで ゆきわたりますように♪と
手と手を取り合う恵まれたその時を、なんて私達は幸せなんだろうと。その平和に満ちたこのような時がずっとずっと続いてほしいと願いながら…今年もその日を迎えます。
私の母は94才で元気に過ごしています。
その母の終戦当時の記を読む度、涙するものです。
母がいつも口にする言葉は「絶対戦争はしてはいけないよ」「隣国とは仲良くしなくては」「人には、どんな時でも親切にしてあげること」です。
満州で終戦になり、それから日本へ引き揚げて来るまでの1年1ヶ月の生活、食べるものも着るものもない生活で大変だったろうと思うが、若さゆえに苦労とも思わず何とか生きて日本に帰ろうと必死だった様です。やっと引き揚げて来て、これから始まる日本での生活、裸で裸足で何一つないところから、様々な障害も乗り越えて生きて行こうとする姿に「平和とは？」と問いかけられてもいるように思います。ひとり一人の力は弱くても、声が広がっていけば、世の中は変わっていくでしょう。
「不戦」への祈りを忘れずに。
まず、身近なところから手と手を取り合って、仲良く笑顔で過ごしていきたいと思います。
今年もいつもと変わらず、
♪キリストの平和が わたしたちの心の…♪と恵まれた聖日を心から嬉しく思います。

今年4月15日に死去した愛川欽也さんの言葉

「戦争というのは、一番弱い者のところに、ダメージを与えるようにできているのです。だから、この憲法による幸せの恩恵についてじっくり考えて、まもっていかないと未来は危ないよ、と言いたいのです。」

「戦争」という文字がこの世界からなくなることを切に祈ります。

主の平和！

牧野 襄

僕が好きな映画にチャールズ・チャップリンの『独裁者』という作品があります。1940年の作品で、チャップリンが監督・製作・脚本・主演を務め、ヒトラーとナチズムの風刺が主なテーマで、有名な映画ですのでご存知の方も多いと思います。なかでも、ラストシーンの6分間のスピーチは映画史上最高のスピーチと言われてます。『絶望してはいけない』というスピーチで、そのなかで、字幕では写りませんが次の台詞があります。

「ルカによる福音書の17章に“神の国は人間の中にある”と書かれている。一人の人間ではなく、一部の人間でもなく、全ての人の中なのだ。君たちの中になんだ」

先の世界対戦、戦争から70年たった今でも、紛争、戦争、テロはなくなりません。私たち人間の歴史にはいつも争いが伴っています。しかし僕は絶望しません。してはいけない、と思っています。戦争は互いが“正義”を主張し、相手を“悪”とし、人殺しをし合う行為だと思っています。

いつの日か“正義”ではなく、私たち人間が“正気”を持って平和を叶えることができますように。

根岸ひろみ

「平和」という言葉を、広辞苑で引いてみると、①やすらかにやわらぐこと。おだやかで変わりのないこと。②戦争がなくて世が平穏であること、とあります。

自分たちの生きる世界が、今日も明日も未来までずっと「平和でありますように」と願わない人がいるでしょうか。おそらく世界中の誰もが、世界の平和を、自分の身近な日常の平和を願い、求めているに違いないと思います。

しかし、誰も望んでいるわけではないのに、世界中の多くの場所で、戦いが続き、国と国が争い、人と人が争い、悲しいでき事が起きます。どうしたら平和な世界になるのか、平和に暮らせるのか…。皆が考えても、簡単に明確な回答は見つかりません。もちろん、政治や法律といった、直接的には、なかなか私たちの力が及ばないところに委ねられている問題も大きいのですが、それでも、私たち一人ひとりが自分で考え、守っていけるものもたくさんあるのではないかと思います。

互いに争うことなく、平穏であるためには、様々な約束事や規律が必要です。法律や規則などの約束事の中には、自分の意に沿わないことや思い通りにいかないことも多々ありますが、自分の都合だけを優先させるのではなく、他の人や全体のことを考え、我慢したり譲ったりして、規律や秩序に従うという姿勢がなければ、人と人が心地よく過ごすことはできません。最近、個の尊重という言葉に流され、我慢するという意識が薄くなってきているのではないかと感じます。

そして何より、人と理解し合う努力を怠らない、ということです。相手を理解し、受け止めるためには、思考力や知識、想像力、相手の主張や希望を受け入れようとする柔軟さが必要です。また、自分をわかってもらうためには、相手が理解できるきちんとした言葉で伝える必要があります。簡略な言葉で相手に察してもらおうというのは無理があります。しっかり言葉を学び、コミュニケーション力を高めることが、相互理解につながっていくと思います。

約束事や規律を守ること、人との相互理解を深めることなど、とても簡単なことのように思えるかもしれませんが、実際にこれを実行するには、様々な力を身に付けていかななくてはならず大変なことです。国も地域も学校も、すべて人の集まりです。私たち一人ひとりがきちんと理解し合い、人とよい関係を築いていけるよう、自分に足りないことを見つめ、更には、子どもたちにも、人として本当に大切なことをしっかり伝え、教育していける大人でありたいと思っています。

戦後70年の夏、過去の戦争を振り返るとともに、今の政治や社会の動きに関心を持ってしっかり学び、平和を祈りつつ、過ごしたいと思います。



“私たちは、大きいことはできません。
小さなことを
大きな愛をもって行うだけです”

～マザー・テレサ～

わたしたち、ひとりひとりはとても小さなものです。

しかし、神さまはいつも私たちと共にいてくださり、愛してくださいます。

私は、頂いているたくさんの愛と恵みに感謝し、愛をもって、キリストによる平和を祈り求めていきたいと思ひます。

「憲法」

中川 雅彦

小学生の頃、社会科の授業で憲法九条の話聞き、日本は何と素晴らしい憲法を持っているのだろうと子供心に感銘を覚えたことをいまだに鮮明に記憶しています。

その憲法を今の日本人は誇りに思わないのでしょうか。争うことを良しとするような風潮はどこかで絶対に止めなければなりません。「善をもって悪に報いる」という聖書の教えを、いついかなる時にも心に留めていたいと思ひます。

石井 園子

今、この日本と言う国がとても不安定な土台の上でぐらぐらしているように感じます。私たちは過去、歴史の中で「日本は大きな戦争をして尊い命がたくさん犠牲になったことから多くのことを学び、もう繰り返さない」と法律を作り、今、それに守られて平和な国となった」と学びました。漠然とそのことが頭にあり、日本は「戦争をしない国」と当たり前のように信じてきました。ところが、新しく法律が変わり、そうでなくなるのかもしれないと、とても不安を覚えます。

新しい物が大好きな私たちは、次々と出てくる新しい物に心を奪われ、生活をより豊かにしてきました。そのことによる恩恵もたくさん受けました。反面、その豊かさ故に多くの大切な物を失ってもきたのだと感じます。新しく変化していった方が良いこと、変わらず守り通していかねばならないことを見極める目と心を持っていたいと思ひます。何よりその力を私たちはひとりひとり神様から授かっているのだと信じます。もっとこの国のことを知ること、他の国のことを知ること、そして、先人から多くのことを学ぶこと…未来を生きる子どもたちが、精神的にも肉体的にも「平和」であり続けられるように心から祈っています。

佐藤 純子

私の祖母は終戦当時、妊娠三ヶ月、満州にいました。来る日も来る日も、いつ日本に帰れるのだろうと思いつつ、六畳一間に三家族が身を寄せ合って暮らしていたそうです。

厚氷の季節が過ぎ春めいた三月に出産。そして、その年の九月にいよいよ引き上げを開始。

幼い子どもを抱えつつ、どんなに大変だったかと思うのですが、祖母はいつでも周りの風景や人の温かさを目を向け、辛さから何か幸せを見つける人だったことを、祖母の当時の手記を読み実感しました。

・・・暗闇の中歩き続けていた時の手記より・・・

背なの児も何も知らず、母の背を揺籠の如く安らげく眠っている。・・・その時私の眼先を秋の蛍がよぎって行った。それは美しい生命の果てる最後の閃光であったろう。

心密かに感動の涙が溢れた。

「今し超ゆる 星一つだに無き 暗き夜の
眼先に来て 蛍飛び交う」

アンデレ 木下不二香

- ・毎週、日曜日の朝、教会で、イエスさまのお話を聞ける私達は、平和な毎日を過ごせているのだと思う。
- ・一人一人が周りの人達のことを思いやり、好きになる(愛する)気持ちを持っていれば、差別や争いが起こることもないのでは…と思う。
(人に愛されること以上に人を愛することが大切なのでは…)
- ・武器を使うこと、戦争は絶対にやってはならないこと。
- ・家族が健康で毎日を過ごせるという当たり前のことが、平和で有難いことだと思う。

アンデレ 加藤 実穂

祖父母が話をしてくれる戦争の話は「本当に大変だった」「とても辛い時代だった」「繰り返してはいけない」で、詳しい話は話したくない様でした。(聞いたのは私が小学生の時でしたが、その後は聞いてはいけない話かなと思ってきました)。それ程に思い出したくもないことを多く体験したのだと思います。今、日本は戦争をしていませんが、世界では多くの人が戦争の中にいます。誰もしたくてしていないと思いますが、話合いができない、自分以外の考えを間違いだと聞く耳を持たないので戦争になっているのだと思います。お互いが少しでもお互いの考えを(自分はそうは思わなくても)協調できる世界になればいいのにとおもいます。

「消えない記憶が消える時～今、私たちができること～」

アンデレ 野本香矢子

戦後 70 年、戦争を体験された方もだんだん高齢となり、やがて“忘れることのできない「あの日」の記憶”が語られなくなる日がくるでしょう。近い将来、戦争体験のない日本社会を迎えた時、その「戦争の記憶」を継承していくことが戦争を知らない私たち世代の務めだと思えます。

簡単に人を殺してしまう、子どもを虐待するなど信じられないような事件が後を絶たない今日、「戦争をしない＝平和」ではないと強く感じます。70 年前の事実を語り継ぎ伝えていくと同時に、自分自身に引きつけて、平和とは何かを考えていくことが必要だと思えます。私の考える平和への第一歩は「ゆるす」ということです。怒り、憎しみのつまった「ゆるさない」…その先には悲惨、苦痛、絶望しかないように思えます。「ゆるす」ことは「悪に屈する」ということではなく、自分自身を解放することで、客観的に物事を見つめ直すことができ、冷静な判断、穏やかな解決へと導いてくれるのではないのでしょうか。「ゆるす」…その先には、愛・平和があります。一人一人の考える平和を大切に、その小さな平和を積み重ねていくことが大きな平和へとつながっていくと思えます。

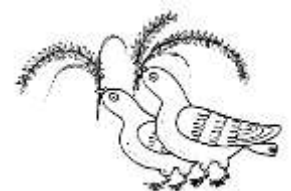
「戦争非経験者として」

アンデレ 鍵山麻祐子

私は戦争を経験していません。
今の多くの人がそうであるように、見たり聞いたりしたことしかありません。
子供の頃、戦争の悲惨さについてたくさんの授業を時間を割いて行いました。
子供心に「こんなにやらなくても知ってるし」と少し辟易としたこともあります。親になった今、命の尊さ、重みの感じ方があの頃と比べて全く違い、先生方に教えて頂いた事を噛み締めています。
戦争を知らない私達ですが、誰も戦争なんかしたくないはずなのに海外では常に戦争が絶えず、人が命を奪い合っています。
最近では憲法 9 条の件もあり、戦争をより身近に感じ、不安が首をもたげます。
戦争を知らない世代に戦争の悲惨さを伝えていく。世代を超えて認識を共有することが、戦争への抑止力になると思えます。

アンデレ 田口 純子

私が小学校 6 年生の時「夏休みは広島へ行く。歴史の勉強が始まった今、現地でいろいろ見て知って考えるべきだ。」と原爆ドームや平和記念資料館へ連れて行ってもらいました。その後もひめゆりの塔などへ行き、戦争や平和について考える機会を戦後生まれの両親は度々与えてくれました。
戦後 70 年、今でも世界では争いや飢えで苦しんでいる人がいる、明日生きていられるか分からない中で生きている人がたくさんいる。先日娘から「ママの夢は何？」と聞かれました。突然の質問に答えられず考え込んでいたところ「夢ないの？こんな風になりたいとか。頑張ったら叶うから作った方がいいよ。ちなみに私はね…」と、娘らしいふたつの夢を笑顔で話してくれました。
2011 年の東日本大震災、東京に住んでいた私たち親子は出先で震度 5 強の揺れに遭い、目の前で商品棚が倒れ天井にひびが入る中、人生で初めて死を感じました。
6 才になり笑顔で夢を語る娘を見て 2011 年 3 月 11 日を思い出して、今こうして元気に生活している幸せを改めて感じました。そして世界中の子どもたちが娘のように未来に期待を持って夢を語る事ができる世の中にしていきたいと強く思いました。娘が 6 年生になったら私も広島へ連れて行こうと決めています。両親が私にしてくれたように、娘にも平和について考える大切さを伝え、つないでいってほしいと願っています。



「未来へと続く希望」

アンデレ 林 諭子

戦後70年の節目の年に思うこと、それは伝えることです。
戦後70年経った今、戦争体験をされた方が少なくなってきました。戦争の体験や辛さを伝えることが難しくなっているのです。
でも、本や書物がたくさん出版されています。
それらの中で共通していることは、2度と戦争をしてはいけない。ということです。
様々な立場や境遇で戦争を体験している人たちが、同じ過ちを2度と繰り返さないで欲しいと訴えているのです。
それは、なぜでしょうか？
家族や愛する人、友達、罪のない子どもたちの命が一瞬にして奪われてしまうのです。
そして大切な人たちを失う悲しみや苦しみを味わうことのないように、平和な世の中が続くことをみんなが願っています。
これは、願わないと叶わないものなのでしょうか。
平和は、当たり前ではないのですね。
平和な世の中にするには、良識ある人たちの努力と願いが必要です。
一人ひとりの小さな願いと平和への思いが、未来への第一歩だと思います。
子どもたちのために、未来のために、努力できることは何か考え話し合っ、この平和な世の中が恒久的のものでありますように、心から願います。

「平和への祈り」

アンデレ 小島 淳子

わたしにとって平和とは……すべての人が、それぞれに置かれた環境で、自分らしく、心豊かに過ごせることです。必要なだけの衣食住が皆にいきわたるよう支えあい、人を羨んだり、ねたむことなく、当たり前の日々で感謝し、一人ひとりの心が満たされている世界です。
戦争や貧困、災害や事故、暴力や虐待といった現実と直面している人たちには、一刻も早い救いの手が必要ですが、たとえ豊かな暮らしの中にあっても、人よりも優位に立とうとする傲慢さや、楽なほうに流される弱さがあれば、人の心を傷つけたり、争いや自然破壊を生む発端となり、平和な日々を送ることはできません。
そうと頭でわかっている、自分のわがままを抑え、理想に向かって生きていくことは本当に難しいものです。だからこそ、人には「祈り」が必要なかもしれません。
世界中の人が心をつなげて、互いの幸せを願い、平和を祈ることができたら、どんなに素晴らしいでしょう。それができれば、人が人を傷つけて英雄になる戦争などおこるはずもありません……
日々ふりかえることの大切さを、「祈り」を通して子どもたちに伝え、平和への希望をつなぎたいと思います。

大迫光希子

平和に暮らすことができることを当たり前ではなく、感謝をすると共に、戦争の悲惨さから目を背けないこと。戦争を知らない私たちだからこそ、その歴史を忘れないでいることが大切だと思います。
私は小さく無力な存在ですから、いつも神様を頼って、必死に祈り神様のみこころに従える者として日々を過ごしていきたいです。

藤木 彩奈

平和とは何か…去年の夏期聖書学校で子どもたちに問いかけたところ、「ご飯の心配がいない」「家族がいること」「学校に通えること」などの答えが返ってきました。一見、当たり前と思う事を子どもたちが平和だと思えることが素晴らしいと感じていました。私自身、この世に生まれてから戦争のない時を生きしてきました。敵からの空襲で命の危険に晒されたり、食べる物も住む場所もなかったり、大切な人を失ったり、今では考えられないことばかりです。

終戦して70年、日本はとても平和な国だと言われています。しかし、現代にもいじめや貧困、自然災害など、平和とは言えない状況で過ごしている人もたくさんいます。恵まれた環境を当たり前と思わず、その人たちのことを心に留め、「自分ごとのように隣人を愛すること」のできる人になりたいと日々思っています。



ま
の
い

阿南みなみ

「見上げればあの日と同じ空」という舞台を観に行ったことがあります。終戦目前の特攻隊の人達の話だったのですが、あまりの辛さに終演後、席から立ち上がれなかったことを今でも覚えています。誰かを残していった者、誰かに残された者。

夏が来ると必ずこの舞台のDVDを観て、忘れてはならないことの大切さを感じています。

安部 薫

現在の日本は何一つ不自由なく過ごすことができます。自分の人生の中で、戦争について考えたり、体験談を聞く機会が何度かありました。私はそのたびに、戦争の重さや苦しみを身をもって感じました。今でもどこかで戦争が起きているかと思うと心が痛みます。自分にはできることは少ないですが、戦争があったこと、今はとても恵まれていることを子どもたちに伝えていきたいです。

伊藤 愛

戦争について改めて考えると、小学校で学んだぶりのような気がします。小学生の時は経験者の方の話聞き、又、教科書から学び、ただ“怖い”と思うイメージが強かったことを覚えています。今、夏になるとメディアで取り上げられることも多くなり、戦争ものの映画の宣伝もよく見かけます。しかし、子どもの頃の“怖い”という思いから、頭の中で向き合わなければならない、知らなければならないと思いながらも避けるようになっていました。けれども、大人になり、選挙権を持った今、日本の過去と向き合いながら、一国民として考え、行動に移さなければならないと思います。私のように頭では分かっているけれど、なかなか行動に移すことができない、選挙に行かない、若い人が多いのが日本の現状だと思います。自分一人では小さな力ですが、まずは自分が強い意志を持ち、少しでもできごとへ行動を移せるようにしていきたいと思

います。次に平和について考えることですが、世界のストリートチルドレンと呼ばれる子どもたちに私は強く関心という言い方はおかしいかもしれませんが、不安を抱えています。これもまた小学生の時に見た“世界がもし100人の村だったら”というテレビの番組を見て非常に驚き、悲しい気持ちになったことを覚えています。それから大人になってから、少しずつではありますが、本やインターネットを通して調べるようになりました。まだまだ自分にはどのような手助けができるか分からず立ち止まっているところですが、まずは、今の世界の現状に目を向け、詳しく知るところから始めようと思います。微力ではありますが、少しでも世界の子どもたちの力になれることを考えていきたいです。

金井亜矢香

私が考える平和は「忘れない」ことだと思います。私が住んでいた所は戦争で壊滅的な被害を受けた駅が今も残されています。その理由として、当時の市長が「忌まわしい戦争があったことを忘れてはならない」と取り壊す予定だった駅を残すことにしたそうです。つまりは、同じあやまちを繰り返さないために残されているんだと思います。だから、私に出来る事なんて本当に少ないですが、このことを「忘れない」でいることが大切ではないかと思

「平和とは」

高3 浅野 風

おおまかに平和と言っても漠然としているので具体的に何かはわか

りませんが、私は平和は個人個人が幸せだと感じてその各々が集まった時、「平和」という大きな枠組みになるんじゃないかなと思います。つまり、平和だから幸せなのではなく幸せだから平和に保たれるのだと私は思います。貧しくても家族一緒にいることができるのが幸せなら、お金がなくとも穏やかに過ごせて、逆にお金持ちでも友人がいなくて寂しいのだったらその人にとっての人生はつまらないものになりますから。

しかし、自分が幸せなのに「幸せ」というのを越えてわがままになってしまうと「戦争」が起こってしまうのも事実です。“幸せが集まれば平和に、誰かがわがままになれば戦争に”

そして幸せとわがままが紙一重であって、違いが分かりづらいのも世界中の平和が訪れない原因なのかなと思います。



「世界が平和になるために、何か少しでも私にできることはないか。」そう考え始めたのは、中学校の修学旅行で長崎に行った時でした。被爆者の方から、直接お話を聞いたり、資料館を見たりして、“平和”ということについて改めて考える機会が与えられました。

中高生が、核兵器をなくすための活動をしているという話を聞いたことも、私に大きな刺激となりました。私と同年代の人たちが、しっかり考え、行動できているのに、自分にはなににもできていない、と思いました。そして、その「何かできないか。」という思いは、高校生になって、広島やカンボジアへ行き、更に強くなりました。

しかし、そんな思いをもって過ごしながらも、情けないことに、今現在、その「何か」は見つかっておらず、具体的に何も行動はできていません。何か行動を起こすというのは、とても難しいことです。頭で考えているだけでなく、何かしなくては、とわかっていても、実際にはなかなかできません。ただ考えているだけで時間が過ぎて行ってしまう中、最近、小さいけれども、もしかしたら私にできるかもしれないということが見えかけてきました。それは、私が、戦争について、また平和の大切さについて聞いたこと、感じたことを、人に、特に戦争のことを詳しく知らない私より小さい子どもたちに伝えていくことです。戦争体験者の高齢化に伴い、私たちは、戦争の体験を、直接聞くことができる最後の世代かもしれないと言われていきます。私は、今まで何度となく、教会や学校で戦争を体験した方々からお話を聞く機会が与えられました。これまでに聞いたことを、私自身も忘れずに、更に人に伝えていくことが大切だと思います。まずは、戦争とは何なのか、どんなことなのかを知ることです。知らなければ、何も考えることもできないし、平和の大切さもわかりません。平和のために何も行動できないどころか、悪い方向に転がって行ってしまう可能性もあります。そのようなことにならないように、私の知っていることを一人でも多くの人に伝えていきたいと思っています。

今も、日本を含め世界は、とても不安定な状況にあると思います。そのような中で、時代の流れに流されるのではなく、自ら平和のために学び、考え、行動できる人でありたいと思います。

高2 木下 愛

私は平和とは一人一人が今を元気に生きることができ、常に幸せだなあと感じられることなのかなあと思います。

私たちがすぐに戦争を止めたりすることは難しいと思うので、まずは、自分のまわりでのけんかを少なくしたりなど、出来ることから始めていきたいです。そうすれば、私たちが平和になり、段々と世界も平和になっていくのではないかなあと 생각합니다。

高1 木村優美香

「戦争を2度としてはいけない」とよく聞く言葉だけれど、具体的にどのようなことが「2度と戦争をしない」につながるのかを考えました。そこで私が一番大切だと思ったことは「語り継ぐ」ということです。私たちが戦争は危ないとか、苦しいとか、辛いというイメージが経験していないのについているのは戦争を経験した方たちがこれから、生きる私たちに伝えてくださったからです。私たちは様々なところで、戦争についてのお話をきく機会があります。身近な所だと自分のおじいちゃんやおばあちゃん、さらには学校などでも聞くことができます。私たちはそういった場所で聞くことのできた貴重なお話は聞くだけでなく、さらにいろんな人たちに伝えていかなければなりません。もし、語り継がれず、いつか戦争を全く知らない人たちがたくさん出てきてしまうと日本だけではなく、他の戦争をしていない国でも戦争を始めてしまうのではないかと私は思います。「語り継ぐ」ということはとても単純で簡単なことかもしれませんが、でも、それは日本をはじめ世界を平和にする大きな一歩だと思います。

中2 加藤 穂華

平和とは戦争を2度とくりかえさないこと。
平和とは、他人同士が愛しあってお互いにささえあうこと。



学校の宿泊行事で、“平和”について考える時間がありました。そこで気づいたことがありました。“平和”には「単に戦争・紛争が起こっていない状況である」ということと、「戦争がないことに加えて、身体的にも精神的にも穏やかで安定して状況である」ということとの2種類があるということです。「戦争がない」という面では、日本にいる私たちは平和の中にあるといえると思います。しかし、悩み事があったり、不安があったりすると一人ひとりの感じ方によっては平和ではないと思うことがあるということです。また、差別や偏見によって平和ではない、苦しい状況にいる方もいるはずです。

そのように考えていくと、「世界平和」という言葉の意味の深さも変わってくるのだと思います。戦争のない世界にするのも難しいのに、後者の平和な世界をつくるのは個人の感じ方などによるため、限りなく難しいのではないかと思うからです。

しかし、逆に私たちがつくり出すために行動を起こしやすい平和は後者の平和であるとも考えられると思います。例えば、自分が相手に何か気持ちの良いことができれば、相手の“平和”をつくることができるかもしれないからです。あいさつをすること、相談にのること、笑いかけること…たくさんヒントはあると思います。

最初に書いた2種類の「平和」の前者は「消極的な平和」、後者を「積極的な平和」というそうです。

私たちは消極的にではなく、積極的に平和を求めていけるようにしたいと思います。

「沖縄を感じて」

根岸 咲和

「お前はスパイだろう。」

外国のアクション映画のワンシーンかと思われるようなこの言葉。これは69年前に、日本人が、何の罪もない自分と同じ日本人に投げつけた言葉である。

私はこの夏、『ひめゆり』というミュージカルを観劇した。題名通り、太平洋戦争において沖縄地上戦に巻き込まれ、多くの人が命を落とした「ひめゆり学徒隊」の少女たちの実話を基にした舞台だ。その中で、私の脳裏に焼きついているあのシーンで、その言葉は発せられた。

地上での戦いが激化し、大勢の日本兵や島民たちが避難している防空壕で赤ちゃんが泣き出してしまふ。懸命に泣き止ませようとする母親から、ある日本兵が赤ちゃんを奪い取り、首を折って殺してしまう。「泣き声でわざと居場所を知らせているな。お前はスパイだろう。」と母親を責め立て、更にその母親にも銃を向ける日本兵。あまりの衝撃に、私は思わず目を反らしてしまった。

正気ではない。狂っている。正に狂気だ。戦争は人間を狂わせてしまうのだ、と私は背筋の凍るような恐怖を覚えた。

今までにも、教科書や本で読んだり、実際に戦争を体験した方からお話を伺ってきたりして、戦争の恐ろしさを感じる機会は多くあった。しかし、読んだり聴いたりして想像をすること以上に、今回観た舞台の光景は、生々しく私の心に突き刺さってきた気がする。その息苦しいほどの重さは、実際に私が沖縄で見てきた「ひめゆりの塔」にある地下壕の様子とミュージカルのシーンとが、私の中で重なったからかもしれない。

私は今年の春休みに、家族旅行で沖縄へ行った。他の場所では見られないような美しい色合いの青い海、青い空に心癒される旅であった。だがやはり、私の心に強く残っているのは「ひめゆりの塔」へ行ったことだった。人気のない静かな夕方、木々に囲まれ当時のまま残された地下壕を見ていると、私は胸が押し潰されそうになってしまった。上からでは、ごつごつした岩の壁と入口しか見えないが、地下にもぐり、L字に折れ曲がった奥の方へ進んで行ったら、今でも傷ついた兵士たちが横たわっていきそうだとドキドキした。

『ひめゆり』の舞台で、動員された少女たちが、換気のない蒸し暑い劣悪な環境で、婦長たちと共に必死に兵士たちを看護している場面を観て、あの地下壕がぴったりとそのシーンと一致し、私に迫ってきたのだ。今、あの場所を思い出して頭の中で壕をのぞくと、学徒たちの残像が見えてくるようだ。戦いが進んで散りぢりになり、一人また一人と消えていく仲間たちを見て死と向き合う少女たち、兵士たちののはかり知れない恐怖までも私の心に伝わり、深く沈んでいく。

私は小さい頃から今までに、何度か夢の中で、戦争の最中を生きることがある。自分が逃げているのを見ているのではなく、自分自身が必死に弾から逃げ回っている。今回、『ひめゆり』を観て感じたのは、この夢の感覚に近かったのかもしれない。私たちは戦争について知り、伝えていかなければならないということは分かっている。しかし、戦争の本当の恐ろしさをどれほど感じられているのだろうか。わかっているつもりになっていても、私は何もわかっていないのだ、と改めて気付かされ、考えさせられた夏だった。

集団的自衛権の問題など、考えなければならぬことがたくさんある。憲法9条により守られてきた平和をこれからも私たちが守って行けるよう、感じたことを忘れず、大切にしていきたい。

(2014年 捜真女学校文集より)

「平和」

6年 澤野 可奈

戦争とは小さい揉め事が起き、そして、国と国の争いになる。大きな争いが70年前に起きた。そして、多くの人の命がうばわれた。学校で平和学習をした時に「広島原爆」という本を読んだ。その本には、今まで私の知らなかった戦争のことが書かれていた。原子爆弾が広島に落ちる時、青かった空が見えないほどの光を当時広島にいた人たちは見たという。そして爆弾が爆発し、広島は3千度～4千度の気温に熱せられた。

そして70年が過ぎ私たちが世界を平和にする時が来た。今の日本は戦争をしていないが、日本が平和の中戦争をしている国はたくさんある。そして、学校の平和学習で私はいつも笑顔でいようと思った。

「平和とは」

6年 山口 咲優

平和とは何かと考えた時、「平和ではないとはどういう事か」とつい考えてしまいます。平和ではないというと、「戦争が起きている」や「世の中がみだれている」ということを想像します。そうすると、平和とは「戦争が起きていない、おだやかな世の中」ではないかと考えます。そもそも戦争はどうして起きてしまったのかを考えると、第一次世界大戦や第二次世界大戦は各国が自分のやりたいことを実行するために他国を支配しようとしたから起きたのだと思います。そうしたら「各国が自分のやりたいことを実行するのを少しがまんして、他国と協力し合えば済むことではないか」という結論にいたります。

とはいえ、そんなに簡単に解決することではありません。なかなかうまくいかないのです。そうしたら、少しずつでも平和に近づけるように各国、世界の人々が努力すればいいのではないのでしょうか。そうすれば、そのうち世界は平和になり、二度と70年前のようなひどい戦争は起こらなくなるのではないかと思います。





平和

鈴木 政子

私は、何の不自由もなく、生活している今が平和だと思います。

中島 陽子

人類はあやまちから学ぶ力を持っていると信じます。必ず全ての人々が平和を感じられる世の中がやってくると信じます。

アンデレ 縣 恵子

平和とは、身心共に健康で、心穏やかに過ごせること。幸せとは…と、同義な気もしますが。

アンデレ 山口奈津子

何にも恐れることなく、子どもと未来の話ができること
それが平和だと思います。

アンデレ 中曽根孝子

平和。
不安を感じない生活を送れること。
日々をなごやかに過ごせること。
生まれてきてくれた子ども達のためにも大人はそう過ごせる環境を守ってやらなくてはならないと思います。

「平和とは」

アンデレ 木村 和江

- すべての人々が平等であり、すべての人々が『幸せ』と言える毎日を送ることができること
- 他人に優しくする気持ちをもって生きていくこと

アンデレ 久米 陽子

認め合い
平和と希望 受け入れて
我が子に語る
幸せな今

酒井 大志

今、平和に暮らしていられるのは、先人が“平和”を守ってきてくれたから。これからも私たちはいつも主のみこころに聞き従い、祈りをもって平和を引き継いでいきたい。

浅井恵美子

ただ、ただ、祈ります。
平和を…

中川 真紀

“エゴから争いがうまれ、愛から平和が生まれる”と思います。

愛
平和



この冊子を作っている時に、平塚敬一先生からお手紙をいただきましたので載せさせていただきます。

なぜか最近、鹿児島の大空襲のことをたびたび思い出します。

昭和20年の元旦は大雪で、鹿児島市内の家で弟と下駄の歯にはさまった雪を踏み石に当てて、カンカンたたいっていると、ものすごい轟音を立てて見たこともない大きな飛行機が頭上を飛び去ったことを覚えています。それからは毎日のように空襲警報が鳴り響き、いつも防空頭巾を被って防空壕に逃げ込んだものです。

その年の4月に鹿児島県立男子師範付属国民学校に入学しましたが、ほとんど登校しないうちに、6月17日夜、鹿児島市内が焼野原となる鹿児島大空襲となりました。その夜、防空壕の入り口から見える空は、次々に落される照明弾、真昼のような明るさの中で燃え上がる鹿児島の街、あの夜の光景を私は忘れることができません。市内にあった平塚の家は全焼、母や叔母に手を引かれて雨のように降ってくる焼夷弾を避けながら、やっとのことで大村という農村に疎開することができました。疎開先でも米軍の飛行機が毎日のように飛来、山の中に蚊帳を吊って何日も過ごすことになりました。そして8月15日正午、大村の疎開先の縁側で天皇の玉音放送なるものを聞くことになりました。

「戦争が終わったのよ」と母から説明され、目の前の黄金色に広がる田んぼが、そして8月の晴れた空が、どこまでも果てしなく荘洋と見えたのを覚えています。

今にして思えば、想像を絶するような時代でありましたが、あれから70年も経ってしまいました。

最近の安保関連法案をめぐる国会の動きや、自民党の若手国会議員らの対マスコミへの思い上がった言辞、沖縄に対する無礼な発言、新国立競技場の無責任な対応などに、じりじりした気分で日々を過ごしています。東京新聞に投稿した文が掲載されました。

無職 平塚 敬一 76

(横浜市都筑区)

憲法の擁護義務放棄

一九三九年生まれの私にとつて、物心ついた時には太平洋戦争が始まっていた。当時の小中学校では、子どもたちは「必勝の信念」をもって、戦争に「勝つ」とだけが教えられ、「負ける」という言葉は言ってはならない、考へてはいけない「禁句」であった。それが戦時中の「皇国民教育」であった。

ミラー

その教育が四五年八月十五日の敗戦で崩壊し、天皇の名によって制定・下付された「大日本帝国憲法」は終焉。そして四七年五月三日に施行された「日本国憲法」は、主権者である国民が、国民の名において確定した憲法で、戦後日本の出発点となった。

この不戦の誓いを取り外せば、何よりも私たちは、アジアと広島・長崎や沖縄など、多くの戦争犠牲者たちを裏切ることになる。安保関連法案が衆議院で可決されたが、憲法を無視し、法案に賛成した国会議員の罪責は決して許されるはずがない。憲法には「天皇又は摂政及び国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員は、この憲法を尊重し擁護する義務を負ふ」(九九条)と述べられている。このことの重大な意味と責任を放棄した自公の国会議員の暴挙を、私たち国民は決して忘れてはならない。

東京新聞

2015年(平成27年)7月23日(木曜日)

